

教職を目指す学生の当事者意識の現状と課題

－「教職論」の実践から－

On the Sense of Parties concerned of Teacher-Training Students

－ From the Practice of the Subject “Teaching Profession Study”－

金 丸 洋 子*

要旨

教職を目指す学生の当事者意識は、教職課程の学びへの意欲や学びの質を高めると考える。「教職論」は教職課程では必須科目であり、早い時期に開講され、教職の意義及び教員の役割、教員の職務内容等の理解を図ることを目的としている科目である。

「教職論」履修後の教職を目指す学生の当事者意識を、定期試験に出題した「教育は人なり」の学生の解釈と考えを分析し全体的傾向を捉える。

また、併せて、多様な学生が多い現在、個々の理解も理解方法も多様である。講義と映画「学校」のDVD視聴を並行して行った授業方法が、教職を目指す学生の当事者意識の涵養の支援として適切かを考察する。

キーワード：教育は人なり(Education depends on Personality)／

映画「学校」(the movie “Gakko”)／教育と教職(education and teacher trainin)

I はじめに

本学の人間総合学部幼児児童教育学科は、小学校教諭普通一種免許状と幼稚園教諭普通一種免許状及び保育士資格を取得できる養成課程を有する。入学時調査では100%の学生が免許取得を希望している。しかし、1年生後期や2年生の時点で免許取得希望を取り消し、コース変更しているケースが10%程度みられる。成績不振や適性の問題、志の変更等、個により理由は種々である。教師や保育者の在り方が問われている現代社会では、「子どもが好き」「安定している職業だから」等だけではなしえない教職である。人間形成を目的とする教育に携わることが、自分には不適と早期に判断してコースを変更し学びをスタートすることも、選択の一つではないだろうか。

本学では、基幹科目「教職論」は、「教職の意

義等に関する科目」として1年次後期に開講している必修科目である。「教職論」の講義を担当している中で、学生自身が受講を通して人間形成を目指す学校教育の主体者になるという当事者意識を涵養したかどうかという疑問をもった。そこで、定期試験において、「教育は人なり」についての自分の考えを記述する問題を設定する。その記述内容をもとに、「教職論」履修後の当事者意識の調査を行う。その結果は、教職を目指す学生を支援するために活かしていきたい。

また、多様な学生が多い現在、個々の理解も理解方法も多様である。毎回の授業方法として講義と映画「学校」のDVD視聴を並行して行うことは、教職を目指す学生の当事者意識の涵養にどのような影響があるか、また、方法として適切なのか検証を試みる。

II 「教職論」の授業の内容及び方法

1. 授業概要

1回から5回は「保育者論」、6回から15回は

* KANAMARU, Yoko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
国語、国語科教育学

学校教育における「教職論」とし2名の教員で分担している。以下は筆者が担当している「教職論」に特化して記述する。

教職を目指す学生がスタートラインに立つことができるように、教職の意義や職務を遂行するための必須事項全般について概略を説明し、学生が理解することを授業の目的としている。しかし、知識として記憶に留めていることが、本当に「理解している」ことだろうか。事柄の意味や重要性を認識し実感してこそ、「理解する」に近づけるのではないだろうか考える。そこで、山田洋次監督制作の映画「学校」を講義と同時並行で視聴を試みる。映像教材はストーリー性から興味関心をもてること、また、テレビや情報化時代に育った学生にとっては、文字情報よりも読解が容易ではないかと推測し教材とする。視聴覚教材視聴で読み解いた各自の気付きや意見は、その場でパネルディスカッション形式で交流しアクティブラーニングとする。事後、ワークシートに各自がコメントを記述し提出とする。

2. 映画『学校』の概要

映画『学校』は1993年、山田洋次監督が東京都荒川区立第九中学校夜間学級をモデルに制作する。山田監督は夜間中学校の授業を実際に体験し、観客も出演者と一緒に考えて始める映画ができれば素晴らしいと思い制作した映画である。夜間中学校は学校教育法の中では存在しない学校であり、本来はあるべきではない学校である。公立の夜間中学は昭和26年（1951年）開設以来、現在でも存在し、平成26年（2015年）時点で31校あり生徒1,849人が学んでいる。¹

映画『学校』の舞台は学校教育の場としては特殊である。しかし、この映画は、学校教育における学ぶ、教える、導く、育てることについて、教師、生徒、社会等の多方面から、気付きや考えることのできる教材である。エピソードからなる12場面で構成されている。

3. 視聴方法

約100名程度の受講生は、学力、意欲、態度にも大きな差異がみられる。全編を通して視聴後に教員が解説を講義したりレポート提出を求めたり

しても、一方向からの受け身の学習になりやすく意欲や能力の違いを埋めることは難しい。各場面のエピソードで取り上げられている生徒の置かれている環境、年齢、仕事、悩み等は異なっている。同じ場面でも視聴する学生の視点や問題意識により気付きは異なる。その違いを学生間で交流することは、他学生の考えを知ることにも、自分の気付きや意見を見直す機会にもなると考える。よって、場面ごとの視聴を実施することとする。

視聴後に、学生によるパネルディスカッション的交流の場を設定する。時間的な制約によりディスカッションというよりも、司会とパネラー5名による意見発表といった感が強い。

4. 講義

教員による講義部分は前半45分間程度を想定して行っている。「教職の意義等に関する科目」に含むことが求められている必要な事項を網羅して教授することには時間に限りがある。そのため、講義のレジュメを準備し効率化を図っている。キーワードや重要部分については書き込み式を採用し、講義を聴かざるをえない状況を設定している。講義の内容と映画の内容とが連動していると映画を読解するときの思考にもつながる。しかし、教職論としての筋道と映画のストーリーとは、齟齬をきたしているのが現状である。

Ⅲ 授業実践からみえる教職を目指す当事者意識

1. 「当事者意識」の筆者の捉え

本稿での教職を目指す当事者意識について、筆者は次のように捉えている。

- ・自分自身が教職を目指しているという自覚をもっている。
- ・教職は長期の知的な専門教育が必要であることを理解し、大学における学びの意欲や質を高めようとしている。
- ・学びを自己に引き当てて考えようとしている。

幼児児童教育学科に入学し、免許・資格取得を希望して教職課程の登録をしていることは、教職を目指す選択であり行動であると捉えることができる。しかし、この時点での選択や行動に、自覚や当事者意識が伴っているかどうかを見極めることは難しい。教職へのあこがれや希望をもってい

でもそれを実現できるかどうかは大学での学び如何である。学生の大学での学びの意欲や質を高めるためには、教職を目指す当事者意識を涵養していくことが課題であると考ええる。「教職論」では、教職の意義及び教員の役割、教員の職務内容等の理解等を、具体的にイメージし自己に引き当てて考えられるようになることが、当事者意識の涵養に資すると考えている。

2. 映像「学校」視聴後のワークシートからみる教職を目指す学生の当事者意識

担当している10回の授業は、講義・映像「学校」視聴・パネルディスカッションという流れで行い、教師の資質と能力に関する場面の読解を事後学習としている。読解課題はエピソード内容をもとにパネルディスカッション後に筆者が設定している。以下に読解課題に対する学生の記述例をもとに、教職を目指す学生の当事者意識についてみる。

2014年度第15回

講義：教師という仕事の魅力について

映画「学校」：場面12最高の授業

読解課題＜黒ちゃん先生はなぜ最高の授業だと思ったのか＞

例1 A学生

えり子が「幸福って何？」という質問に黒井先生は答えを言うのではなく、生徒たち自身で考えるように促し、生徒たちが「幸福が何かを知るために勉強する」という結論を自分たちで導き出すことが出来た。それは、生徒たちと黒井先生とで作り出した大切な学びである。このことから、黒井先生は「クラスは生徒と先生が汗水垂らして一生懸命作っていくもの」だと言ったことから、先生も学ぶことが出来たのだと考える。

「待つ」関わりは教育をする上で必要であることが分かり、「教えること」だけが教育ではないと学んだ。

例1は読解課題に正対した記述は書かれていないが、A学生が「最高の授業」だと考えた理由は下線部分の文章から分かる。また、2重下線の部分からはA学生の新しい学びであり、当事者意識があるからこそ気付き獲得できた学びととらえら

れるのではないだろうか。

例2 B学生

先生から生徒へ一方的に学びや知識を教えるのではなく、生徒自らが考え、互いに学び合っていくことが大切になってくると思う。また、生徒たち自身が1つの事に対して様々な考え、意見、疑問を持つことで学び合い、学びを展開させ深めていくことが授業だと思う。そうした授業の中で、生徒同士や先生と生徒の信頼関係が築かれていくのかなと「学校」という映画を観て感じた。

このことから、えり子やみどり達がイノさんの死から「幸福とは何か」の疑問を持ち、カズ達が自分の思っていることを打ち明けながら、「幸福とはお金のように使ったらなくなるものではなく、形があるものではない。」と、皆で考えた結果がでてくる。黒井先生は皆が真剣に考え「死」と「幸福」について広く深く学び合ったことが、「最高の授業」と感じたのだと思う。

例2の下線部分は、B学生の考える授業観ととらえることができるだろう。読解課題に正対し、その授業観とエピソードの内容を関係づけて記述している。当事者意識があるからこそ自分なりの授業観をもつことができると考える。

3. 「教育は人なり」の記述からみる教職を目指す当事者意識

森 秀夫氏は、『「教育は人なり」といわれる。教育は教育者と被教育者の間の愛情と信頼による全人格的な触れ合いを基本とするものである。』²と述べている。筆者自身、教職において中堅にさしかかった折に、「教育は人なり」の言葉に初めて出会い、教師としての自分自身を反省したことを記憶している。施設や物的事情が発達している現代でも、学校教育での教育行為は子どもと教師が「向い合うこと」から始まる。よって、教育は教育者次第であり、よい教育はよい教育者によって行われることの重要性が、「教育は人なり」と昔からいわれてきているゆえんを考える。

「教職論」の履修を終え学生に、教職を目指す学生の当事者意識についての調査を試みた。以下に、調査方法及び結果について述べる。

* 調査方法

「教職論」の定期試験における設問の一つに、学生にとって初見であろう「教育は人なり」という一文について自分の考えを記述する問題を設定する。

・2013年度 2014年2月4日実施

設問「教育は人なり」といわれる。なぜ、そういわれるのか考えて書きなさい。また、「教育は人なり」という考え方について自分はどうか書きなさい。下記の原稿用紙に150字以上420字以内で書きなさい。

・2014年度 2015年2月5日実施

設問昔から「教育は人なり」と考えられてきている。「教える立場」を目指す者として、なぜ、そういわれるのか考えて150字以上420字以内で書きなさい。

* 調査人数

・2013年度 106名

・2014年度 93名 合計 199名

* 「教育は人なり」の記述文からの当事者意識の抽出方法

広辞苑では、「教育は人なり」の「なり」は助動詞で、体言・体言に準ずる語に付き、事物を断定し、または、解説するのに用いると記されている。直訳すれば「教育は人である。」となる。本稿では、「教育は人なり」という一文を学生がどのようにとらえて自分の考えを導いているかで、教職を目指している学生としての当事者意識があるかどうかを筆者自身が判断・判別していくこととする。その際、次の4項を判別基準とする。

- ①「人」を教師・先生等の「教える立場」としてとらえ記述していると判断できる文章とする。
- ② 教員としての基本的な資質能力や自己規律・倫理等について言及している。また、「教える立場」を自己に引き当てて記述していると判断できる文章とする。
- ③「教育」について第三者的な視点や自分の知識・理解を駆使して記述していると判断できる文章とする。
- ④無解答及び上記①②③の項目に判断しかねる文章とする。

以下に ①、②、③と判断した文章例を示し、判別基準の参考とする。

判別基準①

「人」を教師・先生等の「教える立場」としてとらえている。

例3 2013年度C学生

教育の仕方は人それぞれだと思います。何も怒らない先生や怒ってばっかの人、授業の仕方が内容を分かりやすく伝えているか、ただひたすら口答でさらさらとすませる人など、教育の仕方は人それぞれだから、教育は人なりというんだと私は思いました。学校というテレビを見て、一人一人誰のことに目もそむけない先生の教育は、誰もあきらめずに物事をしていくと思います。先生に怒られることは悪くないけど、暴力をふるう人もいます。人生に1度しかない学生生活などをいやな思いで終わらせてしまう人もいるかもしれません。教育は学ぶために教えてくれる人によって、習い方、習うものなど変わってきます。だから、教育は人なりと言うんだと思いました。

話し言葉での記述であり、表記にも誤記がある。一重下線部分から「人」を教師・先生等の「教える立場」としてとらえていると判断できる。生徒側の視点で記述している表現が多い。

例4 2014年度D学生

私は教える側の立場の人が相手に伝えたいという気持ちを持ち、教えられる側の立場の人が知りたいという気持ちを持つことによって教育は成り立っていると考える。例えば、教える立場の人に伝えたいという気持ちがなければ、その人の説明は教科書などの文書と同じであり、記憶には残るかもしれないが、一時的な記憶としてのみ留まり、心に響く一生の財産としては残らないのではないだろうか。また、教えられる側の気持ちとのすれ違いも起こり、教育のねらいや内容が相手に伝わらないと考えられる。これらのことにより、教育は双方の気持ちが大切であり、気持ちを理解し合うためには、人間同士の関わりが大切なのではないかと考える。このことから、「教育は人なり」という考えが生まれたのではないだろうか。

「人」を教師・先生等の「教える立場」としてとらえている。二重下線部分から教師と生徒のコミュニケーションが教育であると結論付けている。

判別基準②

教員としての基本的な資質能力や自己規律・倫

理について言及している。「教える立場」を自己に引き当てて記述している。

例5 2013年度E学生

教育基本法第9条にある通り、教育は自己の使命を自覚し、学び続け、職責の遂行に努めなければならない。教員が教員としての使命感を強く持ち、教師像に近づけば近づく程、生徒や保護者までも模範となる。教育は教員の人柄や誠実さが表れるということから、「教育は人なり」といわれるようになった。

この考え方について私は、まさにその通りだと思った。今まで関わってきた先生の中にも、授業準備がしっかりしていて、授業の流れも大体予習してきたことが感じとれる先生や、生徒一人ひとりの個性を重んじてくれる先生、授業内容から少しそれる程にたくさんの関係する知識を備えている先生などは、とても尊敬できるものだった。映画で見た黒ちゃん先生もその類だ。授業を型にはめて行うのではなく、今大切なことを学べるような授業を展開し、生徒一人ひとりを理解できるような先生になりたいと思う。教育は人なりという言葉思い返せば、やる気の源にもなると考える。

一重下線部分は、法的根拠も挙げて「人」を「教える立場」として結論づけている。二重下線部分は「教育は人なり」を自己に引き当てて記述している。

例6 2014年度F学生

私は「教育は人なり」と言われるのは、教師が子どもたちを教育することにより、その子どもたちの未来やこれからの考えなどに大きな力をもたらし、人間の育成に関わっているからではないかと思う。人間が育成されるにあたって教育をされなければ、自分たちの未来だけでなく、今、生活している社会の未来さえも閉ざしてしまうのでは思うからだ。

私は、初めて「教育は人なり」ということを聞いたが、人間を育成するためには、教師は使命感があり責任のある仕事を受けて立つという気持ちがないと、そう簡単に教育者になってはいけないと思った。

一重下線部分は「人」を教師・先生等の「教える立場」としてとらえている。二重下線部分からは「教育は人なり」を自己に引き当て感想を述べている。

判別基準③

「教育」について第3者の視点や自分の知識・理解を駆使して記述している

例7 2013年度G学生

人間は一人ひとりに個性的な人間になる素質を備えられています。しかし、このような素質も発展するには適当な環境に置かれなければなりません。人は孤立しては人間としては育つことはできず、人間によってつくられている社会的、文化的環境に置かれることにより、初めて人間としての成長をします。教育とは社会の一員として育てるはたらきがあるため、「教育は人なり」といわれていると考えます。

人は周りと接することで個性を見つけます。また人の行動を観察することで良い面や悪い面を知っていきます。それにより人はおおいに成長をしていると私も考えます。

一重下線部分からは、人間という言葉から始まり「教える立場」という解釈をしていない。二重下線部分で「教育」について結論づけ、「人」を社会の一員としてとらえている。

例8 2014年度H学生

「人間は教育によってはじめて人間となることができる」とカントは述べている。そのように、人間は生まれて成長していく中で様々な力を身に付けていく。しかし、それらの力は使い方が分からなかったり、使わずにいるとどんどん力を失っていく。そこで、教育を受けることによって、人間はその力の使い方を知ることができる。また、力を使うことでどんどん力は伸びていく。このことから、人は教育を受けなければ、自分の持っている力を身に付けることができない。教師はその力の使い方を教え、育て、子ども達が力を最大限に引き出せるように支援することが大切だと考える。人は他の動物とは違い、教育を受けることで力を伸ばすことができる。また、教育を受け、一人一人が力を伸ばしていくことで個性が生まれ、自分に足りない力があれば、周りの人と協力をすることもできる。人は教育をすることで人間となれ、教育を受けた分だけ人間は力を伸ばせるので、教育は人なりと考えられる。

一重下線部分、二重下線部分から「人」を「教えられる立場」子どもととらえていることが読みとれる。

* 調査結果

2013年度

表1 2013年度・2014年度判断基準別学生数(人)

判断基準	①教える立場	②資質能力等言及	③教育とは	④無記入	合計
2013年度	24	47	32	3	106
2014年度	17	52	26	0	93

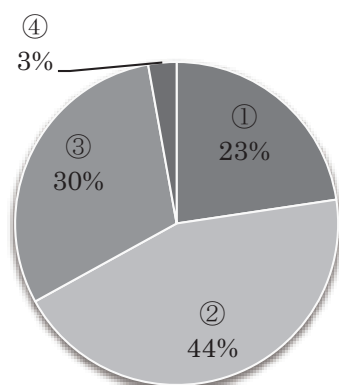


図1 2013年度判断基準別学生数の割合

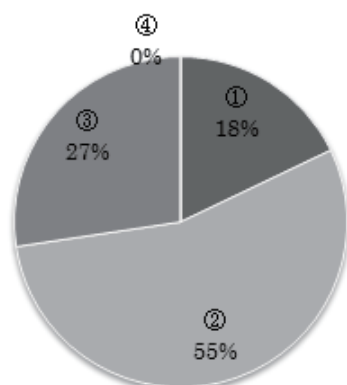


図2 2014年度判断基準別学生数の割合

判断基準①の学生は「人」が教える立場の教師であることを読み取り、よい教師と悪い教師の比較やコミュニケーションの大切さ、教師の影響等を挙げている。しかし、自分の考える教師観を述べているに過ぎず傍観的な感が強い。判断基準③の学生は文を読み取ることが苦手で読解力に欠けるきらいがある。本稿では、判断基準②の学生を1年後期時点で当事者意識が高いと位置付ける。次に、判断基準②に該当する記述について、教師の基本的な資質能力等や自己に引き当てて言及してある箇所を抽出分類して傾向を調べる。該当する観点が複数ある場合はそれぞれを1人として集計する。

分類の観点としては、基本的な資質能力としては、ア豊かな人間性、イ学識と研究意欲、ウ教職的専門の3観点到、自律性としては、エ自己規律・使命感・情熱、オ教職の倫理に、自己に関わることについてはカ目標に分類する。

表2 判断基準②に判別される学生の教師に大切だと考える観点別人数 複数回答(人)

年度別判断基準②の学生数	基本的な資質能力			自律性		自己に引き当てる
	ア豊かな人間性	イ学識と研究意欲	ウ教職的専門	エ自己規律・使命感・情熱	オ教職の倫理	カ目標等
2013年度 47人	23	9	13	22	8	17
2014年度 52人	31	13	22	16	1	10

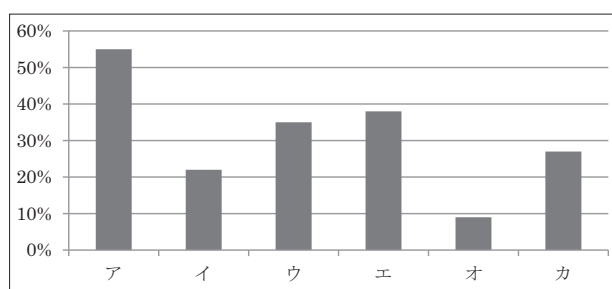


図3 判断基準②全学生の観点別比較

IV 教職を目指す学生の当事者意識の現状と課題

「教育は人なり」の学生の解釈を基に教職を目指す学生の当事者意識を調べた結果、判別基準②に該当する学生の割合は、2013年度が44%、2014年度が55%である。アンケート方式でストレートに「教職を目指していますか」と問えば、結果の数値が高くなることは自明である。当事者意識を結果の数値の大きさだけで決めることは妥当ではないと考える。判別基準②は「教員としての基本的な資質能力や自己規律・倫理等について言及している。また、教える立場を自己に引き当て記述していると判断できる文章とする。」と規定している。両年度を平均するとほぼ50%の割合であることから、教職を目指す学生の当事者意識は高いと言えるだろう。2014年度の判別基準②の割合が2013年度より11%も高いのは、設問を変えて、「教える立場」の者として考えるように指示した

ことが、「人」を教師として限定して読み取ることができたためと考えられる。

全般的に、既習を生かして思考し記述できていることから、授業を通して教職を目指す当事者意識を涵養していると言えるのではないだろうか。主体的な学びや学びの質が当事者意識を涵養するのか、当事者意識が主体的な学びや学びの質を高めるのかは定かでないが、両方の考え方が合わさりトルネードのように高まった先に教職があると考えられる。

判別基準③のように、文を曲解したり設問に正対できなかったりする割合が20%程度在籍していることも事実である。また、例3のC学生のように表現力に課題が見られる学生や自分の考えをもつことができない学生も在籍している。映画「学校」の視聴を授業に取り入れることは、C学生の記事や例5のE学生の記事から分かるように、前述のような学生の理解を支援していると言える。映画「学校」のストーリーは、山田監督が観客も出演者と一緒になって考えてほしいと願っただけあり、学生は興味をもって考えながら視聴している。

判断基準②に判別された学生が、教師にとって大切だと考える観点の抽出・分類は、筆者の恣意的な主観的な解釈になりがちで問題が残る。以下に観点の抽出及び分類例を挙げる。

例9 2013年度I学生（エ、オ、カ）

自分の目の前にいる子どもたちの未来と自分の今生活している社会の未来が、教員になった自分の考えた毎日の教育活動によって形成されていくという教員の仕事の本質を見通していて、そのような責任ある仕事を自分がやろうという決意をもっていることが、「教育は人なり」と言われている理由であると考えた（オ）。その考えから、私は子どもが好きだからという理由で子どもを教育する職に就きたいと思っていたが、子どもたちの未来を左右してしまう教職という仕事に就くことは、そのような軽い思いだけでなく、使命感と責任感をもって子どもたちと関わる職業だということをしっかり理解し、自覚しなければならぬと感じた（エ）。そして、使命感をもち職務を遂行していくことが大切なのだと思ったし、その力をこれから身に付けていかなければならぬと思った（カ）

「使命感や責任感」「教員の本質」「職務を遂行する」等の語句を用いて説明しているが、それを使用できることが当事者意識の涵養につながるとは言い難い。「豊かな人間性」などは最たる例である。しかし、「学校」視聴後の学生の意見の交流やワークシートからは、例1A学生、例2B学生のように当事者意識が強く感じられる。どんな教師になりたいのかそのためにどんな力を伸ばしていくのか、自分の人間性をどのように磨いていくのか等、問題意識をもつことが当事者意識の深まりにつながり、主体的な学びや学びの質の向上につながるのではないだろうか考える。多人数の授業の場だけではなく、映画「学校」シリーズを自主的に視聴し、小グループで考えを出し合い討論しあう授業外自主ゼミがあってもよいのではないだろうか。また、教職を目指す当事者意識が低い学生には、大学での学びの学力的基盤の支援を考えていく必要があると考える。

V 終わりに

授業実践を通して1年後期時点の教職を目指す学生の当事者意識について調べた。読んで分析していく過程で、1年前期で学んだ教育学概論での学びや既習の学びが生かされていることに気付かされたことは新たな発見である。

400字程度の記述ではあるが、ほぼ200枚程度を読み判断・判別していく作業は、非常に恣意的な主観的な解釈となるとあらためて実感する。そこで、2013年度・2014年度の「教育は人なり」の記述を総合してデーター化し、H Coderの「共起ネットワーク」による可視化を試みる。記述の中で、出現パターンの似通った語を線で結んでネットワークを描いた図が、下記の図4、5である。図4は判断基準①②③の分類を基にして、分類と語の連関を表した図である。図5は語と語の連関を表した図である。分析は今後の課題とするが、判断基準の分類と語の連関からは、3（判断基準③）や1（判断基準①）のネットワークとは異なり、2（判断基準②）のネットワークは「人」を教師や教員にとらえ当事者意識をもって記述していると読み取ることができるのではないだろうか。

当事者意識は教育現場を体験することや実際に

子どもと関わる体験により高まることは周知であるが、「教職論」の履修が教職を目指す学生の当事者意識の涵養に資することを願っている。

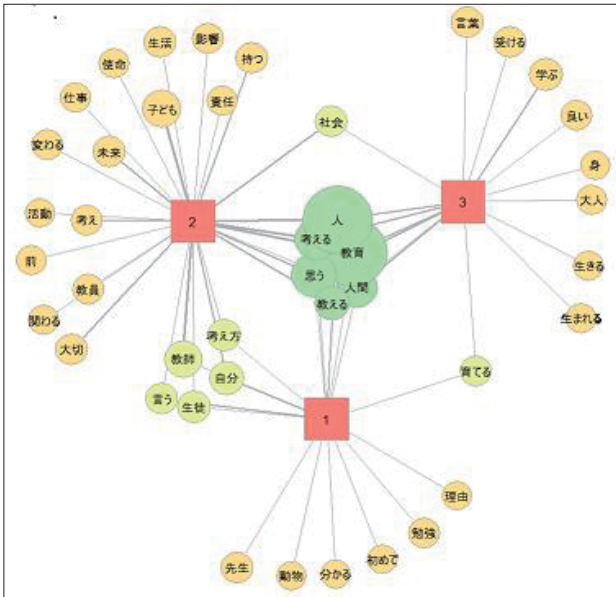


図4 判断基準①②③による分類と語の連関を表す「共起ネットワーク」

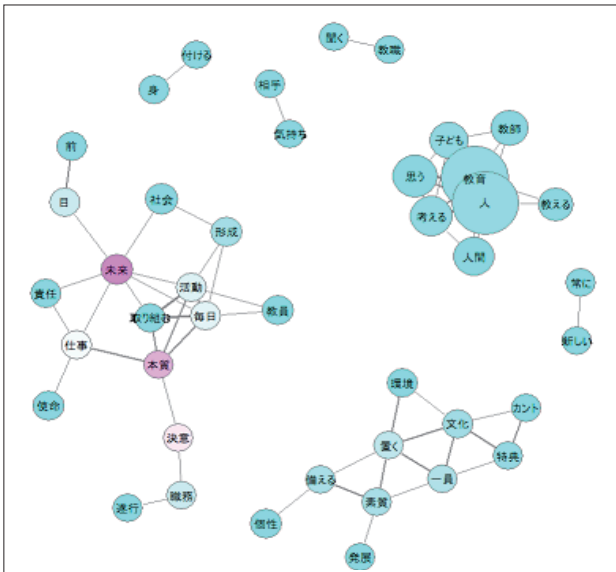


図5 語と語の連関を表す「共起ネットワーク」

謝辞

「教育は人なり」の記述の可視化に際し、北陸学院大学人間総合学部社会学科准教授若山将実氏にご指導ご協力頂きました。ここに心より感謝申し上げます。

〈参考文献〉

¹ 読賣新聞 2015年5月22日12版 夜間中学

² 森 秀夫 「教職の意義と職務」 P, 7

森 秀夫, 「教職の意義と職務 改訂版」, 2013, 学芸図書株式会社

山田洋次, 「学校が教えてくれたこと」, 2000, P H P 研究所

樋口耕一, 「社会調査のための計量テキスト分析」, 2014 株ナカニシヤ出版